

海外にまでPRしてくれた。

中心的な役目を果たした大日電子にも日本のマスコミはもちろん、サウジアラビア、カタールの国営テレビ局が訪れた。本業の取材はもちろん、掃除にも大変、興味を示していた。

小学生の教科書でも取り上げられる

まいど1号の計画は、打ち上げ前の2005年、小学校社会科の学習教材に取り上げられた。宇宙開発組合が動き出してからいくつか、難題が持ち上がったが、学習教材に取り上げられたことは、子どもたちに成功を約束したようなもので、やめるわけにできなかった。



大日電子が紹介されている小学校教科書と自社発行の絵本

成功後の2010年にも小学生の教科書に取り上げられた。そして、2011年春から採用される小学5年生の社会科の教科書の一つには、「日本の工業生産の特色」という章で、8ページにわたって紹介されている。

「なぜ、中小企業が人工衛星を打ち上げることになったか」、「どのように協力したか」などについての記事と、大日電子の技術者たちの写真と思いが大きく掲載されている。もちろん、社長の枚本の写真と記事も。

社員たちは家族、友人などあちこちで褒められ、喜びと自信とやる気を高めたが、枚本には「若い人達にものづくりの技術を継承して行って欲しい」という強い願いから来るもうひとつの喜びがあった。

技術の継承なくして日本の明日はない!

「日本の繁栄を築いてきたものづくりの力が衰退していったのでは、日本の未来はない」と枚本は強い危機感をもつ。だから、東大阪など中小企業のまちに、全国から意欲ある若者たちが集まってくることが夢だ。

そこで、衛星を打ち上げた2009年の暮れ、小さな絵本を出版した。もちろん、まいど1号の成功を紹介したもので、タイトルは「たいようさん まいど!」。

枚本は言う。

「技術を継承していかなければならないこと、ものづくりの大切さと楽しさ、みんなで協力することのすばらしさを、将来を担う子どもたちに知って欲しい、という思いから出版しました。」

「親や祖父母が子どもを膝に抱いて、この絵本を子どもに読んで聞かせる。そして、幼いころから、ものづくり技術の大切さを知って、後を継いでいく。そんな風になって欲しいですね。」

だから、教科書に大きく取り上げられることは望外の喜びだった。

若者といえば、「人工衛星を作りたい」とまいど1号の開発に大学時代から参加、卒業後も研究員として活動してきた学生が、打ち上げ後、そのまま大日電子に就職し、設計を担当している。

会社をクリーンに、掃除道を唱える

ほかにもいろいろなことが変わった。まず、訪問客が急増した。

世間からこれだけ注目される会社になったのに、訪ねてみると社内は汚い、ほごりが多いでは、「良い製品はできんやろ」とみられる。ということで、掃除に一層、磨きをかけだした。枚本も自ら率先してやった。もともと、掃除には早くから力をいれていたからか、大日電子を訪れると、築25年を経ているのに、内部がきれいですっきりしていることに驚かされる。

「掃除は社員のやる気を高めることとは関係無いのでは…」と考える人も少なくないかもしれない。しかし、枚本は、越前・永平寺の修行僧が便所掃除を最も重視したことや、掃除を極めることが自我を捨てることにつながる「掃除道」のハナシなどを社員にする。仕事の能率や精度をあげることも大事だが、

「掃除の心を掘り下げてゆくと、気づかい、感謝、謙虚につながる。大切なことなんや」。枚本はこれを「心の3K」として社員に話している。

お客様への挨拶もしっかりと!

挨拶もきちんとやることになった。

講演に呼ばれることが増えて枚本は「僕が多くの人に話していることと、会社の中身は違うやないか、と思われ

ると恥ずかしいやろ。訪問者はすべて、お客様や。お客様がこられたら、みんなで挨拶しよう」と社員に呼びかけた。

一部の社員のなかには「そのたびに、仕事が中断しますよ」、「設計図づくりに夢中になっているときなどは、来訪者があっても気がつかんことありますわ」と言う声があったが、「『いらっしゃいませ』と頭を下げてすぐに座るのやから、ほんの数秒ですむことやろ」と説得した。

1階が技術系、2階が事務系の職場だが、「お客様がこられました」と誰かが言うと、居合わせた者は一緒に立ち上がって「いらっしゃいませ」と頭を下げる。訪問者にとって、悪い気がするわけがない。同社を訪れた人の間でこの挨拶は、ちょっとした評判になっている。「いい挨拶をすると、いい挨拶が返ってくる。これがコミュニケーションの始まり」と枚本は言う。

「社長の言うとおりにやったら、社長の域を超えられん」

「社長の指示通りにやったら、社長の域を超えられん」と枚本は、社員の自主性を重視して任せることが増えた。社員には積極的にインタビューを受けさせるようにしている。その時は枚本は同席しない。「自分で考え、ポイントを整理して答えれば大丈夫や」と自主性を持たせることにつとめている。

取引先などとの対応をある程度任されると、あれこれ聞かれる場合に備えて、社員たちは、自分の分野だけでなく、会社全体など関連することについても知る努力を始め、社員の間には責任感や一体感が高まっている。

枚本は言う。

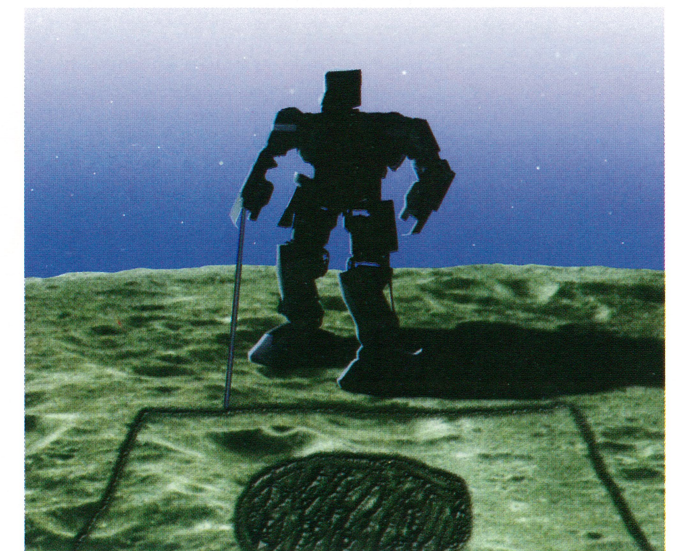
「ぼくも社員も、いろんなことに気づき、学んでいる途中です。まいど1号で挑戦した結果を振り返ってみると、技術、技能を磨くことも必要だが、そのベースとなる人格を磨くことが最も大切です。要するに人間力ですね。人格を備えた…」。

東京では「江戸っ子1号」で深海探査へ。「まいど1号」が刺激

まいど1号の成功は多くの関係者を触発させた。

守口市で部品を製作している中小企業、「淀川製作所」が三輪の電気自動車「Meguru」を開発したのは、まいど1号に刺激されたから。

東京・葛飾区の中小企業は、「我々も負けられん!」と、



月を目指すロボットのイメージ

大学と連携して深海探査ロボット「江戸っ子1号」で1万の海底にチャレンジしようと意気込んでいる。さらに各地の大学や企業の間で人工衛星開発への機運が高まっている。

次は月にロボット 日の丸描いて石を持ち帰らせる

「人工衛星で培った技術をそのまま終わらせたくない」という思いから枚本らは、次は月面へ2足歩行のロボットを打ち上げる計画に向けて動き出した。

内閣府宇宙戦略室の国家プロジェクトによると、日本は2020年ごろ、月ロケットを打ち上げることを計画しており、その際、民間ロボットを相乗りさせたい意向だ。

枚本は、今、東大阪宇宙開発協同組合の理事長。プロジェクトリーダーとしてまいど1号で成功した技術をロボットに活かし、人型ロボットを月に送って月面に立たせ、日の丸を描いて万歳させる試みに挑戦しようとしている。「立つことが難しければ、ハイハイをしても」という。ロボットは月に置き去りにせず、できれば月の石をつかんで、地球に帰還させるという楽しい夢を描いている。

東大阪はもちろん、全国の中小企業にも参加を呼びかける予定だ。10年後、再び、中小企業者たちによるビッグニュースに日本中が驚き、喝采を贈る日がやってきそう。

月ロボット計画の内容をまとめた冊子の表紙に、枚本たちは次のように記している。「つくりまっせ! やりまっせ! 本気でっせ! 心配する前に行動や!」。

文 橋本 剛